

英語の身体部位目的語結果構文と 再帰代名詞目的語結果構文の交替*

野中大輔・貝森有祐

dnonaka200@gmail.com; yusuke_kaimori@yahoo.co.jp

キーワード： 結果構文 身体部位目的語 再帰代名詞目的語 構文交替

要旨

英語の結果構文には多数の研究があるが、目的語としてどのような名詞句が生起するかについては未だ十分に明らかにされていない。本稿では、結果構文の目的語として身体部位名詞句と再帰代名詞句が現れる場合、両者で意味がほぼ同じとなる交替現象に注目し、どのようなときに交替可能もしくは不可能となるのかについて考察する。結果構文において身体部位名詞句と再帰代名詞のどちらが選択されるか、もしくは好まれるかということをつめるためには、目的語と結果句の関係に加え、結果構文独自の性質及び英語の一般的傾向性を考慮に入れる必要があることを示す。

1. はじめに

本稿の目的は、英語結果構文の目的語として生起する名詞句が身体部位と再帰代名詞との間で交替することがあるということに注目し、どのようなときに交替可能もしくは不可能となるのかについて検討することである。

結果構文とは、(1)のように、結果句 (blue, open) を伴うことで「動作主がある行為を行い、その結果として、対象が状態変化を起こす」という事象を表す構文のことである。

- (1) a. He painted the house blue.
- b. He kicked the door open.

結果構文には、動詞が目的語を選択しているものと、動詞が目的語を選択していないものがある。たとえば (2a) では、動詞が元々 the metal を選択している。そのため、結果句 (flat) を省略しても文として成立する (I hammered the metal)。このような目的語は選択目的語と呼

* 本稿は、「言語と人間」研究会第39回春期セミナーにおけるポスター発表「身体部位目的語結果構文と再帰代名詞目的語結果構文の交替」(2014年3月19日、立教大学)の内容に加筆・修正を施したものである。本稿の執筆にあたり、西村義樹先生(東京大学)から貴重な助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。本稿はJSPS特別研究員研究奨励費(課題番号 野中:15J11687)の助成を受けている。

ばれる。一方、(2b, c) では、目的語は動詞が選択するものではない。そのため、結果句 (blind / out / sick) を省略すると容認不可能となる (*I cried my eyes / *I laughed myself)。このような目的語は非選択目的語と呼ばれる。非選択目的語を伴う仕組みについては、様々な理論的枠組みから議論されてきた (Goldberg 1995; Rappaport Hovav & Levin 1998; Simpson 1983他)。非選択目的語として様々な名詞句が現れるが、その中でも (2b, c) のように、身体部位名詞句と再帰代名詞が現れることがあることはよく知られている。¹

- (2) a. I hammered the metal flat. [選択目的語] (Simpson 1983: 148)
 b. I cried my eyes { blind / out }. [非選択目的語：身体部位名詞句] (ibid.: 146)
 c. I laughed myself sick. [非選択目的語：再帰代名詞] (ibid.: 145)

本稿では (2b) のような結果構文を身体部位目的語結果構文 (Body-Part Object Resultatives; 以後 BOR と略記)、(2c) のような結果構文を再帰代名詞目的語結果構文 (Reflexive Object Resultatives; 以後 ROR と略記) と呼ぶこととする。

(2b, c) のような結果構文の存在は、従来から広く認められてきた。しかし、(3) に示すように、BOR と ROR が実質的に同じ状況を表し得ること、つまり一種の交替関係にあるということは、今まで明示的に取り上げられてこなかった。² (3a, b) はどちらも「彼が話しすぎて、その結果として、喉が枯れた」という状況を表している。

- (3) a. He talked his throat hoarse. [身体部位名詞句 (BOR)]
 b. He talked himself hoarse. [再帰代名詞 (ROR)]

複数の形式が実質的に同一の状況を描写し得ることは、構文交替 (alternation) の問題として盛んに議論されてきた。例えば、(4) においては、to 与格構文と二重目的語構文が同一の事態を描写しており、従って、交替可能であるとされる。

- (4) a. Bill sent a package to Tom. [to 与格構文]
 b. Bill sent Tom a package. [二重目的語構文]

従来の構文交替の研究では、同一の事態を描写し得る異なる構文のミニマルペアを比較し、それぞれの構文の性質を明らかにしてきた。本稿では、(3) のように、同じ構文 (結果構文) の異なる下位類 (身体部位目的語か再帰代名詞目的語か) が同一の事態を描写し得ることに注

¹ 本稿における例文の下線は、筆者が付したものである。

² 結果構文における身体部位目的語と再帰代名詞目的語が交換可能なことがあるということは、Jackendoff (1997: 546) 及び Oya (2002: 979-980) に一言及があるものの、Oya (2002: 984, note 14) が「交換可能性には一定の意味的制約がある」と言及しているに留まり、どのような条件で交換可能／不可能となるのかについては議論されていない。

目し、それぞれの下位類の性質を明らかにすることを目指す。同一構文の異なる下位類が同一の状況を表し得ることも一種の交替現象として捉えることで、結果構文及び目的語の選択について新たな観点から光を当ててみる。第2節では目的語と結果句の関係に着目して交替可能性について検討する。第3節では非選択目的語を伴う結果構文が行為の過剰さを表す誇張表現として用いられることがあることを確認し、交替可能性を検討する上で、このような結果構文独自の特徴も考慮に入れる必要があることを示す。第4節では、BOR と ROR が交替可能であるとき、相対的に ROR の方が好まれる傾向があることについて検討し、結果構文及び英語の一般的特徴によってその傾向性が動機付けられている可能性を提示する。第5節では本稿の議論を総括する。

2. 目的語・結果句の関係と交替可能性

最初に、目的語と結果句の関係に注目して、BOR と ROR の交替可能性について検討していきたい。

2.1 BOR と ROR で交替する場合

BOR と ROR で交替可能となるのはどのような場合であろうか。(5) と (6) の結果句の意味に注目してみよう。(5) における *hoarse* は「喉が枯れる」という意味であり、語の意味としてある身体部位が関わることを指定している。同じく、(6) の *blind* は目という特定の身体部位の状態が関わることを表す形容詞である。このように、特定の身体部位が関与することを指定する語が結果句として用いられている場合、交替が成立しやすくなると言えるだろう。

- (5) a. He talked his throat hoarse. (=3a)
 b. He talked himself hoarse. (=3b)
- (6) a. I cried my eyes blind. (=2b)
 b. I cried myself blind.

(7) のような場合は、結果句の形容詞自体に身体部位の指定があるわけではないが、*He is blue* といえば「彼の顔が青い(顔色が悪い)」ということの意味することからも分かるように、メトニミーが成立する場合も交替しやすいことがうかがえる。³

- (7) a. He talked his face blue.
 b. He talked himself blue.

³ (7b) のような例については、(i) のように、身体部位名詞句と再帰代名詞の両方が現れることもある。

(i) He talked himself blue in the face.

以上の観察から、結果句が意味的に特定の身体部位が関与することを指定している場合、もしくは、結果句がメトニミ的に身体部位を指していると考えられる場合、BOR と ROR の交替が成立しやすいと言える。

2.2 BOR と ROR で交替しない場合

次に、BOR と ROR で交替しない場合を見てみよう。(8) と (9) に示すように、結果句が一種の位置変化を表すものである場合、ROR は容認不可能となる。これは、「身体部位の移動」が「身体全体の移動」とは解釈されないことに依っていると思われる。(8a) は「あたかも目が外に出るほどまでに激しく泣いた」という意味であるが、「目が外に出た」からといって「私全体が外に出た」とは解釈されない。(9a) は「あたかも脚が外れるほどまでにたくさん歩き、これ以上は歩けない」という意味であるが、「脚が外れた」からといって「私全体が外れた」とは解釈されない。そのため、(8b) と (9b) は容認不可能となり、従って BOR と ROR は交替できない。⁴

(8) a. I cried my eyes out. (=2b)

b. *I cried myself out.

(9) a. I walked my legs off.

b. *I walked myself off.

また、(10) と (11) のように、結果句が「頭が働かない」や「起きた」といったある種の精神状態に言及するものについては、BOR が容認不可能となり、ROR のみが容認可能となる。

(10) a. *I laughed my head silly.

b. I laughed myself silly.

(11) a. *I cried my eyes awake.

b. I cried myself awake.

以上のように、結果句が位置変化を表すものである場合、ROR は容認不可能となり、結果句が精神状態に言及するものである場合、BOR が容認不可能となる。これはつまり、結果句が身体部位のみ、もしくは身体全体のみを叙述対象とするものである場合、一方の結果構文が容認不可能となり、従って、交替しないということであると言える。

2.3 be 動詞を用いた表現と結果構文の対応関係

以上のように見ると、be 動詞を用いた表現で身体部位名詞句及び代名詞が使用可能であり、

⁴ (9a) のように、目的語として身体部位名詞句、結果句として off をとり、意味として行為の過剰さを表す構文は、特に body part off 構文と呼ばれることもある (cf. Sawada 2000)。

かつ両者が同じ意味を表す場合に、結果構文でも BOR と ROR が交替可能となる、つまり、be 動詞を用いた表現と結果構文が単純に対応しているだけである、というように思われるかもしれない。たとえば、(12) のように、be 動詞を用いた表現で身体部位名詞句及び代名詞を使用でき、かつ、同じ状況を表し得る場合には、結果構文でも BOR と ROR が交替可能となる。逆に、たとえば(13)と(14)のように、be 動詞を用いた表現で身体部位名詞句と代名詞を使ったときに両者が異なる意味となる、もしくは一方のみが容認可能となる場合、結果構文では BOR と ROR が交替しない。

- (12) a. { His throat / He } is hoarse.
 b. He talked { his throat / himself } hoarse. (=3a,b)
- (13) a. { My eyes are / I am } out.
 b. I cried { my eyes / *myself } out. (=8a, b)
- (14) a. { *My head is / I am } silly.
 b. I laughed { *my head / myself } silly. (=10a, b)

このような側面は確かに認められるものの、be 動詞を用いた表現と結果構文が単純に対応しているだけであるとは言えない側面もある。たとえば、(15) では、be 動詞を用いた表現では主語が身体部位名詞句でも代名詞でも問題なく容認される一方、結果構文では BOR と ROR のどちらであっても表現しづらい。

- (15) a. { His stomach / He } is full.
 b. He ate { ^{??}his stomach / [?]himself } full. (cf. Goldberg 1995: 192)

このことは、「be 動詞を用いた表現で身体部位名詞句と代名詞が交替可能であれば、結果構文でも BOR と ROR が交替可能となる」と単純に言うことができないことを示しており、結果構文独自の特徴も考慮に入れる必要があることを示唆している。次節では結果構文特有の性質として、非選択目的語を伴う結果構文が行為の過剰さを表す誇張表現として用いられることがあることを示し、BOR と ROR の交替可能性を検討する上で、結果構文独自の性質も考慮に入れる必要があることを示す。

3. 非選択目的語結果構文の誇張表現としての用法

第1節でも見たように、結果構文には、(16) のように選択目的語を伴うものと、(17) のように非選択目的語を伴うものがある。(16) では、動詞が元々 his hands を選択しているため、結果句 (clean) を省略しても文として成立する (He washed his hands)。一方、(17) では、目的語は動詞が選択するものではないため、結果句 (hoarse) を省略すると容認不可能となる

(*He talked his throat)。

(16) He washed his hands clean. [選択目的語]

(17) He talked his throat hoarse. [非選択目的語] (=3a)

非選択目的語を伴う結果構文は、対象の状態変化そのものを表しているというより、むしろ行為の過剰さを表す誇張表現として用いられることが多い。たとえば (18a) は、舗道が実際に薄くなったということを表しているのではなく、むしろそれほどまでに走ったということを誇張して表現している (Goldberg 1995: 184-185)。(18b) についても同様に、泣いた結果として実際に目が見えない状態になったというより、むしろそれほどまでに激しく泣いたということを表している (Simpson 1983: 146)。

(18) a. The joggers have run the pavement thin. (Carrier & Randall 1992: 217)

b. I cried my eyes blind. (=2b)

実例を観察してみても、誇張表現として用いられていることがあるということを確認できる。

(19a, b) とともに、一生懸命話をしたのに、思ったように話を聞いてもらえなかったことを表している。喉が枯れた状態になったと表現することで、そのような状態にいたるまで行為をしたことを推論させるのであり、行為の程度の強調こそがもっとも重要な情報である。⁵

(19) a. At that time I often talked my throat hoarse, attempting to make it clear, [...] but I preached to deaf ears. (<http://www.mondopolitico.com/library/meinkampf/v2c15.htm> [2016/7/18])

b. [...] I talked myself hoarse explaining, but nobody listened.

(The Corpus of Contemporary American English)

以上の観点から、第2.3節でも提示した (20) について考えてみよう。「ご飯を食べてお腹いっぱいになった」という状況は、(20a) のような **be** 動詞を用いた表現では身体部位名詞句も代名詞も問題なく現れるにもかかわらず、(20b) のように **BOR** でも **ROR** でも表現しづらい。

(20) a. { His stomach / He } is full. (=15a)

⁵ 非選択目的語結果構文の全てが誇張を表すわけではない。たとえば (i) においては、切りつけられたのは目的語である「彼自身」ではなく、「彼」を拘束しているもの(縄など)であり、その拘束しているものを切ることで「彼自身」を自由な状態にしている。そのため、**himself** は非選択目的語であると言える。このように、(i) は非選択目的語結果構文であるが、行為の過剰さを表す誇張表現としてではなく、「彼を拘束しているものを切った結果として、彼が自由になった」という状況を描写するものとして用いられている。

(i) He cut himself free.

b. He ate { ^{??}his stomach / [?]himself } full. (=15b)

(20b) の不自然さには、非選択目的語を伴う結果構文が誇張表現として用いられることが関係していると思われる。(20b) では結果句を省略することはできない (*He ate { his stomach / himself }) ため、(20b) は非選択目的語結果構文である。非選択目的語結果構文は行為の過剰さを描写する状況と相性が良いものの、「ご飯を食べた結果、満腹である」ということは一般的な状態であり、ご飯の食べ方の過剰さを推論させるものではない。そのため、誇張を表現する非選択目的語結果構文では表現しづらくなるのではないかと思われる。

このことは、BOR と ROR の交替可能性や容認性について検討する上で、be 動詞表現との対応関係を見るだけでは不十分であり、非選択目的語結果構文が誇張表現として用いられることがあるという、結果構文独自の特性やイデオム性も考慮に入れる必要があることを示している。

4. ROR の選好性

次に、BOR と ROR のどちらがより選択されやすいかという選好性の問題について見てみよう。一般的な傾向として、非選択目的語を伴う事例の中でも ROR は容認されやすく、BOR は容認性が低く評価される傾向にあることが知られている (Simpson 1983: 145-146)。Levin & Rapaport Hovav (1995: 290, note 2) も (21a) のような身体部位名詞句を伴う結果構文よりも、(21b) のような再帰代名詞を伴う結果構文の方を好む話者がいると述べている。⁶

- (21) a. Sylvester cried her eyes out. [身体部位名詞句] (Levin & Rapaport Hovav 1995: 36)
 b. Dora shouted herself hoarse. [再帰代名詞] (ibid.: 35)

本稿で扱っている BOR と ROR が交替可能な場合についても、ROR の方が相対的に容認性が高く評価される傾向にあり、BOR は不自然であると判断する話者もいた。

⁶ BOR と ROR の両方が成立するものの、両者が交替しない場合もある。たとえば、(i) は選択目的語結果構文の例であるが、(ia) も (ib) も容認可能であると判断される。ただし、(ia) は「手を洗ってきれいにした」という意味として、(ib) は「身体を洗ってきれいにした」という意味として解釈されるため、両者は交替しない。

- (i) a. He washed his hands clean.
 b. He washed himself clean.

一般的には ROR の方が好まれる傾向にあるものの、BOR と ROR の両方が成立するが交替はしない例の中には、BOR の方が好まれる場合もある。たとえば、(iia) と (iib) とでは、身体部位目的語を用いた (iia) の方が容認されやすい傾向にあるようである。この場合、「踊る」という行為の影響が脚に及んで「脚が痛い」という状態になると解釈することの方が、行為の影響が身体全体に及んで「身体全体が痛い」という状態になると解釈することよりも相対的に容易であるからであると考えられるだろう。

- (ii) a. He danced his feet sore. (Verspoor 1998: 156)
 b. [?]He danced himself sore. (ibid.)

この理由の1つとして、たとえ直接関与するのが特定の身体部位であっても、身体部位所有者全体の問題として認識できるような状態について述べていると考えられるときには、所有者全体への注目を優先させるため、BOR よりも ROR の方が好まれるとすることができるかもしれない。たとえば (22) であれば、単に「顔が青くなった」という身体部位自体の変化というより、むしろ「話しすぎて疲れ果てた」ということについて言っているように思われる。そのため、*himself* という身体全体に影響が及ぶことを表すような形式が好まれるのではないだろうか。

- (22) a. He talked his face blue. (=7a)
b. He talked himself blue. (=7b)

もう1つの理由として、英語においては人間の一部分ではなく、人間全体に言及する表現が一般的に好まれる傾向にあるということも関係しているものと思われる。英語では人間全体に言及する表現が好まれるという傾向は、(23) や (24) のように、同一の事態に対して人間の一部分を表現する傾向がある日本語と比べることではっきりとする (Hinds 1986; 本多 2005: Ch. 7)。ROR の方が好まれることには、結果構文に限らないこのような英語の一般的な傾向性も関与している可能性がある。

- (23) a. I've got a pain in my stomach. (本多 2005: 146)
b. 胃が痛む。 (ibid.)
(24) a. I am hungry. (Hinds 1986: 53)
b. 腹がへった。 (ibid.)

以上のように、BOR と ROR が交替するときに、相対的に ROR の方が好まれる傾向にあるということは、身体全体に影響が及ぶことを表す表現形式が好まれるという結果構文の特徴と、英語においては身体部位よりも身体全体に言及する表現が好まれるという英語の特徴によって動機付けられている可能性がある。

5. まとめ

本稿では BOR と ROR の交替に注目し、どのようなときに交替可能もしくは不可能となるのかについて検討した。対応する *be* 動詞を用いた表現で身体部位名詞句と代名詞が交替可能であるときに BOR と ROR が交替するという側面はあるものの、このような単純な対応関係だけでは十分に捉えきれない側面も認められる。非選択目的語結果構文は行為の過剰さを表す誇張表現として用いられることがあり、それによって BOR と ROR が交替しやすくなることがある。また、一般的に BOR よりも ROR の方が好まれる傾向にあるが、そこには、身体全

体に影響が及んでいるような表現形式が好まれるという結果構文の特徴や、英語においては身体全体を表現することが好まれるといった英語の一般的な傾向性が関与しているのではないかと思われる。

従来の研究において、結果構文の非選択目的語として様々な名詞句が現れ得ることは盛んに議論されてきた。しかし、複数ある名詞句の候補のうちどれが用いられるかということについてはあまり注目されてこなかった。本稿は非選択目的語として身体部位名詞句と再帰代名詞が現れる場合に焦点を当て、結果構文における目的語の選択可能性及び 선호性という観点を提供するものである。加えて、本稿は身体と文法の関わり合いについて考える1つの観点を提供するものであるとも言える。身体表現が文法現象にどのように反映されるのかという問題の重要性は広く認められている (cf. 本多 2005; Wierzbicka 1988) が、本稿はこの問題について、結果構文における目的語の選択という観点から考察したものであると言える。

参考文献

- Carrier, Jill and Janet. H. Randall (1992) The argument structure and syntactic structure of resultatives. *Linguistic inquiry* 23: 173-234.
- Davies, Mark (2008-) The corpus of contemporary American English: 450 million words, 1990-present. Available online at <http://corpus.byu.edu/coca/>.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hinds, John (1986) *Situation vs. Person Focus*. 東京：くろしお出版.
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論：生態心理学から見た文法現象』 東京：東京大学出版会.
- Jackendoff, Ray (1997) Twistin' the night away. *Language* 73(3): 534-559.
- Levin, Beth. and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Oya, Toshiki. (2002) Reflexives and resultatives. *Linguistics* 40(5): 961-986.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1998) Building verb meanings. In: Mirian Butt and Wilhelm Geuder (eds.) *The projection of arguments: Lexical and compositional factors*, 97-134. Stanford: CSLI Publications.
- Sawada, Shigeyasu. (2000) The semantics of the 'body part off' construction. *English linguistics* 17(2): 361-385.
- Simpson, Jane (1983) Resultatives. In: Lori Levin, Malka Rappaport and Annie Zaenen (eds.) *Papers in Lexical-Functional Grammar*, 143-157. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Verspoor, Comelia Maria (1998) Predictivity vs. stipulativity in the lexicon. *Proceedings of the Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (PACLIC 12)*, 152-162.
- Wierzbicka, Anna (1988) *The semantics of grammar*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

The Alternation between Body-Part and Reflexive Object Resultatives in English

Daisuke Nonaka and Yusuke Kaimori

dnonaka200@gmail.com; yusuke_kaimori@yahoo.co.jp

Keywords: Resultatives, body-part object, reflexive pronoun object, alternation

Abstract

A number of analyses have dealt with English resultatives, paying insufficient attention to the object noun phrases. The present paper focuses on the alternation between body-part and reflexive object resultatives in English and explores when the alternation is possible. It is shown that the characteristics of resultatives and general tendency in English as well as the relation between objects and result phrases have to be taken into consideration to understand which object is selected or preferred in resultatives.

(のなか・だいすけ 東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員DC2,
かいもり・ゆうすけ 東京大学大学院)